

保育者養成校の学生の実習をととした人間関係の変化

—ソーシャルスキルと友人関係満足感の観点から—

稲 田 達 也

Changes of human Relations of Vocational College Students of
Childcare through Childcare Training : From the Viewpoint of
Social Skills and Satisfaction of Friend-Relationship

Tatsuya Inada

豊岡短期大学 論集

第 15 号 別 冊

平成 31 年 3 月 31 日 発 行

保育者養成校の学生の実習をととした人間関係の変化 —ソーシャルスキルと友人関係満足感の観点から—

Changes of human Relations of Vocational College Students of
Childcare through Childcare Training : From the Viewpoint of
Social Skills and Satisfaction of Friend-Relationship

稲田 達也

Tatsuya Inada

はじめに

保育専攻学生にとって、保育実習は、学校での日々の学習と、将来業とするであろう保育者としての実践とをつなぐ重要な学びの機会である。実習が保育専攻学生に与える影響については、保育者効力感に着目する形で数多くの研究がなされている。三木・桜井（1998）は、保育者効力感を「保育場面において子どもの発達に望ましい変化をもたらすことができるであろう保育的行為をとることができる信念」¹⁾と定義した上で、保育者効力感尺度を作成し、実習が保育専攻短大生の自己効力感を高めること、また保育者効力感をほぼ高める傾向にあることを明らかにした。河村らは、保育者養成専門学校を対象として調査を行い、親和傾向の上昇とソーシャルスキルの習得を目指したプログラムであるCATSによって保育実習前に高めたソーシャルスキルが、保育実習後も維持されることを明らかにした²⁾。小平（2011）は、保育学生に求められる大学適応を捉えるために、「大学適応」「専門領域への興味」「専門職への志向」「職業の継続性」の4因子からなる階層的大学コミットメント尺度を作成し、濱田らはそれを用いて、実習後の大学コミットメントが実習前よりも適応的であることを示した³⁾。これらの研究は、保育者としての免許・資格を取得するためにカリキュラム上必須である実習が、実際に学生にとっての大きな学びの機会となっていることを示している。

Swenson, Nordstrom, & Hiester (2008) は、友人関係が大学1年生の学校適応に影響していることを示して⁴⁾おり、実際に学校現場では、入学後、人間関係に悩む学生は毎年度一定数おり、そのケアに気を揉む教職員は多いのではないだろうか。橋本(2016)は、保育者養成校短期大学に在籍する学生の学校不適応感を把握するために短大生活不適応感尺度を作成⁵⁾した。この尺度は、「保育者志望意欲低下」「学習継続意思低下」「集団所属意識低下」「授業課題達成困難度」の4因子から構成されている。特

に、「集団所属意識低下」因子は「クラスの中で誰と一緒にいてよいかわからない」「私はクラスの中で浮いている気がする」などの3項目からなり、クラスの中で良好な人間関係を構築できていないことが短期大学への不適応感につながることを示唆している。

保育者養成校では、大学での学修が将来の職業選択に直接的に結びついており、大学が居心地よい場所となることは重要である。実際に保育者養成校では、大学に馴染めず入学後早い段階で登校できなくなる学生や、学校にうまく適応できずに、意欲はあるものの勉学に身が入らない学生もいる。一方で、学校での様々な経験、特に実習を通して学生が成長し、次第にクラス内の人間関係も改善されていくことは現場教職員の実感としてあるのではないだろうか。しかし実際に実習を経て、クラス内の対人関係が改善されていく過程を明らかにした研究は行われていない。本研究では、保育者養成の専門学校において、実習を通して学生がソーシャルスキルを身につけ、そのことが結果として学生の学校における人間関係を円滑にし、ひいては友人満足感を向上させるという仮説のもとに、実習の事前・事後で調査を行う。

方法

調査対象者 近畿地方保育士養成系専門学校1・2年生43名（性別：男性13名、女性30名）

調査時期 以下の理由により、平成30年8～10月に実施した。

調査を行った専門学校における実習スケジュールは表1のとおりである。

表1 実習の時期・内容

1年生	①8月：保育所実習(10日間)
	②9月～10月：施設実習(10日間)
2年生	③6月：幼稚園実習(4週間)
	④9月～10月：選択実習(保育所または施設)

実習の前後で調査を実施するために、8月初旬および10月初旬の2回質問紙調査を行った。実習前の調査（以下、事前調査とする）と実習後の調査（以下、事後調査とする）の間に、1年生は①と②、2年生は④の実習を経験したことになる。

調査手続き 授業時間外でのアンケートへの協力を依頼し、同意が得られた場合に質問紙を配布し、調査を実施した。

倫理的配慮 対象者には、本研究の目的・方法を口頭と文書で説明した。調査への協力は自由意志

に基づくものであること、協力に拒否しても不利益はないこと、また回答の有無や内容が個人の成績に影響を及ぼすことは一切ないこと、データは匿名化した上で使用すること、得られたデータは本研究以外には使用せず、本研究終了後に破棄することを説明した。

測定尺度の構成

(1) ソーシャルスキル自己評定尺度 相川・藤田（2005）のソーシャルスキル自己評定尺度⁶⁾を用いた。この尺度は、計6因子、35項目からなる尺度であるが、回答への負担感を考慮し、各因子について、相川・藤田（2005）において因子負荷量が高かった4項目ずつ、すなわち24項目を抽出し使用した。6因子は、「関係開始」「解読」「主張性」「感情統制」「関係維持」「記号化」の因子からなる。全24項目について、「1. ほとんど当てはまらない」「2. あまり当てはまらない」「3. やや当てはまる」「4. かなり当てはまる」の4件法で回答を求めた。

(2) 友人関係満足感尺度 加藤（2001）の友人関係満足感尺度⁷⁾6項目を用いた。この尺度は、日本の青年を対象に作成された対人関係に関する尺度を参考に作成されており、「周囲の友人に受け入れられていると感じる」「私は友達ととても気持ちを通じ合っている」「自分を本当に理解してくれる人がある」「心から親友と呼べる人がある」「誰からも好かれていて感じる」「自分を支持してくれる人がある」の項目からなる。それぞれの項目について、「1. ほとんど当てはまらない」「2. あまり当てはまらない」「3. やや当てはまる」「4. かなり当てはまる」の4件法で回答を求めた。

結果

事前・事後両方の調査において回答した学生は、1年生11名（男2名、女11名）、2年生26名（男7名、女19名）の計37名であった。男が計9名と少ないこともあり、本研究においては男女に分けて分析を行うことはしないこととする。

実習前後のソーシャルスキル及び友人満足感の変化

1年生・2年生の実習前後それぞれのソーシャルスキル及び友人満足感の下位尺度得点を表2に示す。実習前後のソーシャルスキルの下位尺度得点の変化について検討するためにt検定を行ったところ、ソーシャルスキル尺度の「解読」因子得点のみ、有意傾向ではあるものの得点が向上していた。ソーシャルスキルの残り5因子については、「関係開始」「主張性」「関係維持」「記号化」「感情統制」いずれも事前よりも事後の方が得点が高かったが、いずれも有意差は見られなかった。また、友人満足感得点についても、事前よりも事後の方が得点が高かったが、有意差は見られなかった。

ソーシャルスキルが友人満足感に与える影響

ソーシャルスキルが友人満足感に与える影響を明らかにするため、ソーシャルスキルの各下位尺度得点（事前）を説明変数、友人満足感得点（事前）を従属変数とする重回帰分析（強制投入法）を行った（表3）結果、有意な値を示した（ $R^2=.388$ ）。友人満足感に影響を与えているのは、ソーシャル

スキル尺度の「記号化」のみであった。VIF 値は 2.340 であった。小塩 (2005) は、VIF 値の値が 10 以上の場合多重共線性が発生している⁸⁾としており、多重共線性の問題はないと判断された。

表2 実習前後の各尺度得点の記述統計およびt検定の結果

	実習前		実習後		t値
	M	(SD)	M	(SD)	
ソーシャルスキル					
関係開始	2.60	0.69	2.70	0.73	1.16
解読	2.76	0.50	2.87	0.62	1.93 [†]
主張性	2.44	0.62	2.57	0.65	1.36
感情統制	2.45	0.49	2.46	0.44	0.16
関係維持	2.70	0.52	2.82	0.44	1.58
記号化	2.66	0.61	2.76	0.65	1.12
友人関係満足感	2.69	0.54	2.77	0.52	0.83

[†] $p < .10$, * $p < .05$, ** $p < .01$

表3 ソーシャルスキルを説明変数、友人満足感を従属変数とした重回帰分析

友人満足感	
n=37 ソーシャルスキル	
関係開始	
解読	
主張性	
感情統制	
関係維持	
記号化	.470*
.....	
R^2 .388	

a) $\beta > |.20|$ の値を枠線で囲った。

b) [†] $p < .10$, * $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

考察

本研究では、保育者養成の専門学校において、実習を通して学生がソーシャルスキルを身につけ、そのことが結果として学生の学校における人間関係を円滑にし、ひいては友人満足感を向上させるという仮説のもとに、実習の事前・事後で調査を行った。ソーシャルスキルについては、全6因子のうち「解読」得点においてのみ、優位傾向ではあるものの向上が見られた。「解読」は、「表情やしぐさで相手の思っていることがわかる」「顔つきから相手の感情を読み取れる」「話をしているとき、相手の表情のわずかな変化を感じとれる」「自分の言葉が相手にどのように受け取られたか察しがつく」という4項目からなり、実習先での緊張した状況の中で、お世話になる方々に気を使い様子を伺いながら実習に取り組んだ経験が、そのような項目の得点向上に結びついたことが考えられる。また、ソーシャルスキル尺度の残り5因子の下位尺度得点および友人満足感尺度得点についても、得点自体は

事前よりも事後の方が高くなっており、調査対象の集団が大きければ、有意となった可能性はあると考えられる。

次に、ソーシャルスキル尺度の各界尺度得点を説明変数、友人満足感得点を従属変数とした重回帰分析の結果から、特に「記号化」が友人満足感に影響していると考えられる。記号化とは、上述したような質問項目の内容から、要するに自身の喜怒哀楽等を積極的に表現する姿勢であるが、そのことが特に友人関係満足感を良好なものとしていると考えられる。もちろんその際、調査対象者数が多いことは含みおかなければならないが、それでも一定の影響を与えているといえる。また、調査対象者が多くないことから、有意な結果が出難い部分もあり、ソーシャルスキル尺度の残り5因子が友人満足感に影響している可能性もあると考えられる。

これらの考察を総合すると、有意であるという結果を尊重するのであれば、実習の前後でソーシャルスキルのごく一部が向上し、しかし一方でそのことが友人満足感につながるものではない、と見ることはできる。しかし、繰り返しになるが、本研究の調査対象者の少なさを考慮に入れるのであれば、その結果の解釈には慎重になるべきであり、平均値だけを見れば実習後の方が高かったことから、実習の前後でソーシャルスキルの残り5因子や友人満足感が有意に向上する可能性は残されている。また、ソーシャルスキルの各因子がそれぞれ友人満足感に影響している可能性も残されており、これらの点については今後のより大規模な調査により明らかにする必要がある。

本研究の問題点と今後の課題

調査対象者数以外の本研究における問題点及び今後の課題について考察する。

本研究では、1校のみを調査対象とし、また1年生の8月から10月、及び2年生の8月から10月という短い期間において短期縦断研究を実施した。本研究においては、ある保育士養成校において、保育所実習または施設実習を通して学生のソーシャルスキル及び人間関係がどのように変化したかということに関して、一定の知見を提供できたと考えられるが、依然としていくつかの課題が残されている。第一に、実習という活動の効果を一般化するためには、より多くの保育者養成校を対象にした調査が求められる。第二に、2年間を縦断的に追跡し、本研究では、極力他の行事や活動等の影響を受けないように、日程が許す限り、実習の直前・直後に調査を行うことを試みた。そのため、短期間の調査結果を比較した形となるが、2年生の学生生活を通じたソーシャルスキル及び人間関係、またそれらの関係性の変化を捉えられていない。1年生での実習経験と2年生での実習経験では、学生に及ぼす影響が異なることも考えられる。そのため、2年間にわたって各学生の追跡調査を行い、特に影響の大きい行事や実習、または影響を受けやすい時期を明らかにすることも必要であるといえる。

また、保育実習が学生に与える影響を検討するためには、実習にどの程度熱心に取り組んだかという側面や、実習の中でどのような経験をしたかという観点を検討することも必要となる。この点についても、今後より詳細に調査することで、学生がよりよく成長できる実習のあり方に関する知見が得られると考えられる。

引用文献

- 1) 三木知子・桜井茂男. (1998). 保育先行短大生の保育者効力感に及ぼす教育実習の影響. *教育心理学研究*, **46**, 203-211.
- 2) 藤原和政・河村茂雄・川俣理恵. (2017). 保育士養成校に在籍する専門学校生に対する CATS の効果検証. *カウンセリング研究*, **50**, 13-22.
- 3) 小平英志. (2011). 大学適応の階層性に関する検討-保育系短期大学生を対象に-. *日本福祉大学子ども発達学論集*, **3**, 59-69.
- 4) Swenson, Lisa M, Nordstrom, Alicia, & Hiester, Marnie. (2008). The Role of Peer Relationships in Adjustment to College. *Journal of College Development*, **6**, 551-567.
- 5) 橋本 翼. (2016). 保育者志望短期大学生のメンタルヘルスに関する探索的研究(2)-UPI(学生精神健康調査)と短大生活不適応感および保育者効力感との関連-. *近畿大学九州短期大学研究紀要*, **46**, 31-44.
- 6) 相川 充・藤田正美. (2005). 成人用ソーシャルスキル自己評定尺度の構成. *東京学芸大学紀要*, **56**, 87-93.
- 7) 加藤 司. (2001). 対人ストレス過程の検証. *教育心理学研究*, **49**, 295-304.
- 8) 小塩真司(2005). *SPSS と AMOS における心理・調査データ解析*. 東京図書.

参考文献

- 濱田祥子・設楽紗英子・松田侑子. (2017). 実習による保育系学生の大学適応の変化-実習における予期せぬ現実との関連-. *比治山大学・比治山大学短期大学部教職課程研究*, **3**, 103-109.
- 神谷哲司. (2009). 保育者養成系短期大学生の保育者効力感の縦断的变化-実習時期と就職活動を通じた進路選択過程に着目して-. *キャリア教育研究*, **28**, 9-17.
- 岡田 努. (1999). 現代大学生の認知された友人関係と自己意識の関連について. *教育心理学研究*, **47**, 432-439.

謝辞

本研究を進めるにあたり、調査にご協力いただきました学生の皆様に心より御礼申し上げます。

資料: アンケート項目

ソーシャルスキル尺度

関係開始

- 1 相手とすぐに、うちとけられる。
- 6 誰とでもすぐ仲良くなれる。
- 10 知らない人とでも、すぐに会話を始められる。
- 14 人と話すのが得意である。

解読

- 2 表情やしぐさで相手の思っていることがわかる。
- 7 顔つきから相手の感情を読みとれる。
- 11 話をしているとき、相手の表情のわずかな変化も感じとれる。
- 15 自分の言葉が相手にどのように受け取られたか察しがつく。

主張性

- 3 自分が不愉快な思いをさせられたときには、はっきりと苦情を言う。
- 8 友だちが自分の気持ちを傷つけたら、そのことをはっきりと伝える。
- 12 どんなに親しい人に頼まれても、やりたくないことははっきりと断る。
- 16 人の話の内容が間違いだと思ったときには、自分の考えを述べるようにしている。

感情統制

- 4 気持ちをおさえようとしても、それが顔に現われてしまう。※
- 13 困ったときは顔にしやすい。
- 17 感情をあまり面にあらわさないでいられる。※
- 19 自分の感情をコントロールするのが苦手である。※

関係維持

- 5 相手の立場を考えて行動する。
- 18 その場にあった行動がとれる。
- 20 相手の話をまじめな態度で聞くことができる。
- 21 まわりの人たちとのあいだでトラブルが起きても、それを上手に処理できる。

記号化

- 9 表情が豊かである。
- 22 身振り手振りをまじえて話すのが得意である。
- 23 相手に良い感じを持ったら、それをすなおに表現できる。
- 24 感情を素直にあらわせる。

友人満足感尺度

- 25 周囲の人達に受け入れられていると感じる。
- 26 私は友達ととても気持ちが通じ合っている。
- 27 自分を本当に理解してくれる人がいる。
- 28 心から親友と呼べる人がいる。
- 29 誰からも好かれていると感じる。
- 30 自分を支持してくれる人がいる。

※印の項目は、逆転項目である。

